

## 二宮尊徳と勤勉の精神

### ● 14歳から働きつつ学ぶ

二宮尊徳（通称・金次郎）は1787（天明7）年、現在の神奈川県小田原市の農家に生まれました。実家は比較的裕福でしたが、たび重なる酒匂川の氾濫で田畑を失ったうえ、父が病死し、金次郎は14歳で貧乏な家庭を支えることになりました。

金次郎は山で刈った柴や、夜なべして編んだ草履を売り歩いて生計をたてたといわれます。しかし、その間も学問を忘れませんでした。柴刈りの途中も『大学』などの漢籍（漢文で書かれた中国の書籍）を読みつけました。

16歳で母も無くして一家は離散し、金次郎は伯父の家に預けられました。伯父は灯油を惜しんで夜の読書を禁じましたが、金次郎は自分で作った菜種油に火をともして勉強しました。戦前、政府はその勤勉・節約・忍耐の精神を学ばせるため、全国の小学校に金次郎の銅像を建てました。

### ● 「積小為大」を貫く

金次郎は「積小為大」という信念で生きていました。小さいことでも積み重ねると、大を為すという意味で、何事も無駄にせず、工夫をこらしました。田植えの後に捨てられた苗を拾い集めて植え、何俵もの米を実らせました。

農業指導者、経営者として成長した金次郎は二宮家を再建し、頼まれて小田原藩家老、服部家の財政を5年たてなおしました。

続いて、小田原藩主の命を受けた金次郎は、6尺（182



二宮尊徳（1787～1856）

cm）、25貫（94kg）の巨躯をもって下野国桜町領（栃木県真岡市など）の新田開発や荒れ地の再生にかけ回りました。みずから田畑に入って実地指導しました。用水堰をつくり、治水を行い、橋をかけ、町村を復興させました。天保の大飢饉でも領内では1人の餓死者も出ませんでした。

### ● 徳を以て徳に報いる

二宮尊徳は単に勤勉を説いただけではなく、合理的な考えをもち、金銭の使い道をよく心得た財政家だったのです。スケールの大きい社会運動家でもありました。「徳を以て徳に報いる」という尊徳の精神は、明治維新後も引きつがれ、近代国家建設のバックボーンとなりました。